

# SL展示50周年

博物館のSLは、11月6日で展示50周年を迎えます。今号では、展示されているSLがどのようなものなのか、どうやって整備・保全されているのかを紹介します。

博物館 ☎ 68-1881

## SLの歴史

SLとは蒸気機関車のことです。石炭を燃やした熱で水を沸騰させ、そのときに発生する蒸気のパワーを利用して車輪を動かします。簡単に言うと、やかんの水が沸騰し、蓋が持ち上がる時と同じ力を使って走るのです。

日本では、明治2年にイギリスから輸入され、明治5年には新橋―横浜間が開通しました。その後、国産のSLも登場し、日本の産業革命を支えました。大正時代には、技術の進歩と鉄道網の拡充に伴い、日本のSLは大きく発展しました。第二次世界大戦中は、多くが軍事輸送に使用されましたが、戦争が終わると、燃料効率が高い電化やディーゼル化が進行し、SLは急速に衰退しました。そして、昭和51年に姿を消しました。こうして姿を消したSLですが、現在では、地域の活性化や産業遺産の保存を目的に、一部が保存・修復され、運行されています。

## D51とは

D51は、主に貨物や勾配線用大型機関車の輸送用として、昭和11年〜20年に1,115両が造られました。日本のSLの中で最も多く造られた形式で、語呂合わせにより「デゴイチ」の愛称で親しまれ、多くの人々や貨物を運びました。

博物館に展示されているD51は、昭和13年10月31日に国鉄浜松工場で造られ、東海道線、中央線、高山線で活躍しましたが、昭和48年6月6日に引退しました。その運転距離は、2,384,380km(地球約60周分)にものぼりました。

